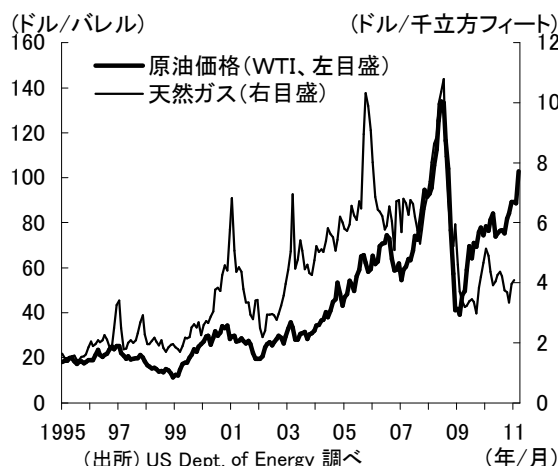


転換するエネルギー構造

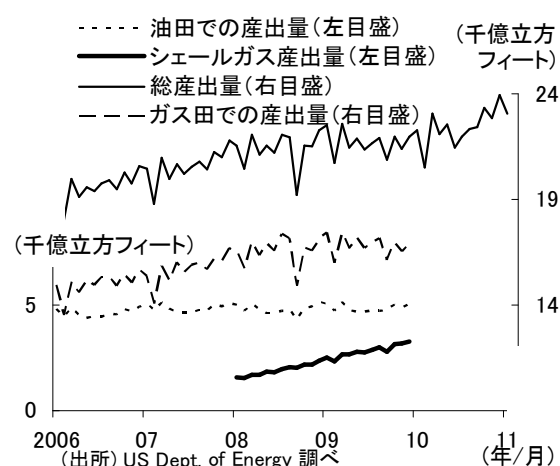
～ 強まる原油・石炭から天然ガスへの流れ ～

- (1) 従来、エネルギー価格は総じて連動して推移。しかし昨年秋以降、原油価格が再び大幅に上昇するなか、天然ガスはむしろ弱含み（図表1）。両者の連動性が後退。
- (2) 原油価格上昇の背景には、力強い新興国の経済成長に伴う需要増加や中東情勢の流動化等、様々な要因が指摘可能。しかし、このところの天然ガスの価格動向には、原油と異なる供給要因が作用。世界最大の天然ガス生産・消費国である米国をみると、埋蔵量を含め2000年代半ば以降、それまでの一進一退の推移から増勢に転換（図表2）。油田での天然ガスの産出量は横ばいであり、増加はガス田での産出量増加。主因はこれまで放置されてきた岩石に含まれるシェールガスの生産本格化。08年初と09年末の生産量をみると1,577億立方フィートから3,273億立方フィートへ2年で産出量が倍増。
- (3) IEA世界エネルギー予測（10年11月発表）によると、①原油は2000年代半ばをピークに30年代半ばまで漸減、②石炭は当面増加するものの10年代半ば以降頭打ちになるなど、従来、エネルギー需要を支えてきた原油・石炭の生産水準の大幅な底上げが見込み薄ななか、今後のエネルギー需要増を賄う切り札は天然ガス（図表3）。再生可能エネルギーは長期的視点から有力視されるものの、当面、副次的役割にとどまる見通し。
- (4) さらに米国EIAのエネルギー予測（11年4月26日発表）によると世界の原油生産は09年の大幅な減少から反転し10年代半ばまで増加するものの10年代後半には増勢鈍化へ（図表4）。一方、液化天然ガスは中期的に一貫して増加。そうしたなか、天然ガス生産国としてウズベキスタンやトルクメニスタンなど新たな資源国が台頭。資本流入を梃子に新興国入りへ。

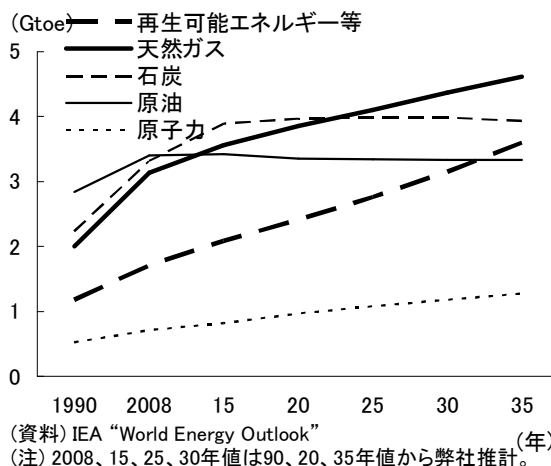
（図表1）原油価格と天然ガス価格の推移



（図表2）米国の天然ガス産出量



（図表3）世界の長期エネルギー見通し(IEA)



（図表4）原油・液化天然ガス生産量見通し(EIA)

